

戦争の記憶を未来へ

女子学院中学校3年

上野 遙

令和4年7月3日に昭和館「次世代の語り部」である上野順一さんの講話を聴いた。「ぼくの家にも戦争があった」という題で、順一さんが父親の基さんから聞いた戦争体験についてお話してくださった。その内容を大まかに振り返ってみたい。

昭和10年、上野基は横浜に下駄屋の長男として生まれた。6人兄弟で唯一の男子だったためか、少し気弱な面もあった。父親の福次郎は無口で怖かったが、下駄職人としての腕は良く、8人家族は普通の暮らしを送っていた。しかし戦争が始まり、生活は一変する。昭和19年、基は小学3年の時に学童疎開を余儀なくされた。箱根湯本の恵比寿旅館で生活するようになるが、栄養失調になってしまい、短期間で帰宅した。学校に戻ろうとするが、そこは戦争により病院となっていたため隣の学校に復学した。

1945年5月29日、基が10才の時に横浜大空襲が起きる。いつもと変わらない昼間、横浜市を中心とした地域がアメリカ軍の無差別爆撃の焼夷弾によって、火の海に一変した。死者は3,649人、負傷者は11,978人であったという。煙の中を必死に逃げ、なんとか家族全員無事だったが、変貌した街を見て悲しさが込み上げてきた。

戦争が終結しても、その傷跡は残り続けた。食糧が十分になく満足に食事ができなかったり、アメリカ兵が家の周りで騒いでいることに恐怖を感じたりした。不安な出来事は後を絶たず、戦前のような安心した日々を送ることは難しかった。それでも人々は復興に向けて前向きに歩み出し、1950年には基も日本通運に就職して働き始めたのだった。

以上が伺った戦争体験の内容だが、考えさせられることが多々あった。特に戦時下の生活の悲惨さから、当たり前の日常を送ることができる幸福を改めて実感させられた。講話の最後に、順一さんが現在の基さんの言葉を引用した。「戦争体験は、忘れたくもないが思い出したくもない記憶。毎日が平凡であることは有難いのだから、感謝しなければならない。戦争について考えることは平和について考えることだ。」と。この言葉には、基さんの苦々しい戦争の記憶と平和への願いが強く込められていると感じた。戦争は心身共に人々を傷つけ、そこから得られるものは何もない。しかし、現在でもウクライナとロシアの間では戦争が行われ、多くの犠牲者が出ている。戦後77年が経過した今もなお、私たちは戦争の惨禍を目の当たりにしているのだ。これからの未来を担っていく私たちにできるのは、基さんもおっしゃっていたように、残酷な過去から教訓を学び、歴史を受け継いでいくことだろう。今後も戦争を起こさないための知識を磨き、希望の持てる平和な世界をどうしたら築いていけるのかを、自分なりに絶えず考えていきたいと思う。